

いうのですが、わたしが習ったロシア語とはだいぶ違って、たとえばガ行音がハ行音になるので、新聞 *razera* も「ガゼータ」でなくて「ハゼータ」になってしまう。万事こんな調子で、聴き取りには苦労しました。

しかしコミュニケーションというものは、教室で習う言語のみによっておこなわれるわけではありません。おじさんもおばさんもわたしに矢継ぎ早に質問しながら、リンゴやチューインガムをくれました。すでに二十歳だったのですが、よっぽど子どもに見えたのでしょうか。リンゴを食べる食べるといので、皆さんの目の前で丸かじりしますと、ソ連のリンゴらしく酸味のある好みの味。美味しいなあと思っていると、次の質問が飛んでくるのですから、落ち着いて食べている暇がありません。中には質問したい気持ちが勝ってしまい、モルダビア語で話しかけてくる人もいました。だからできないんだってば！ 困っていると例のおばさんが、ウクライナ風のロシア語で説明してくれます。それを頑張って理解して、ロシア語で一生懸命に答えるのですが、そうするとリンゴのほうがお留守となり、またしても食べろ食べろです。

質問の内容は他愛のないもので、日本のどこからきたのか、どうしてロシア語を勉強しているのか、兄弟はいるのかなど、ロシア語会話の授業で習ったようなものばかり。両親の年齢を聞かれたので、これも難なく答えました。するとおばさんは「あら、お父さんのほうが年下なのね」といいます。そうですよと答えたのですが、なぜか一瞬シーンとしました。あれ、それって一般的じゃないのかな。するとおばさんが元気よく「まあね、あたしの亭主も年下だからさ！」といて、その場が和みました。さらにはその年下の亭主が、何も知らずにコンパートメントに顔を出して、一同爆笑に包まれたわけです。

考えてみれば、ロシア語を使ってロシア人以外と会話する経験は、このときがほぼはじめてでした。いただいたガムは後で食べたのですが、フレーバーが分離している微妙な味だったことは、今ではよい思い出です。

これがわたしの初海外旅行ですが、さて、ここまで何か国を回ったのでしょうか。現代の目から見れば、ナホトカとハバロフスクはロシア、キエフとオデッサはウクライナ、そしてキシニョフは現モルドバ共和国ですから、3つの国を巡ったこととなります。でも当時は1つの国。ビザも1枚だし、通貨も同じ。都市間の移動だって、飛行機も鉄道も、すべて国内便だったのです。それが今では、国名や都市名までが変わってしまいました。

お分かりですね。わたしは訪れた国が数えられないのです。ソ連だけでなく、ユーゴスラビアで訪れた4つの都市は、今ではすべて別の国々。だからわたしにとっては、何か国を巡ったかと数えることが、まったく意味がありません。それよりも、誰と話したかのほうが大切で、ロシア語一つ取っても、そこからいろんな人と交流ができたことが、密かな自慢なのです。

## <日ロ交流情報>



### ロシア文化フェスティバル 2025

## 4月21日、オープニングコンサート

4月21日、ロシア文化フェスティバル 2025 IN JAPAN のオープニングコンサートが、東京・銀座ブロッサム中央会館で開催されました。シュビトコイ・ロシア組織委員長とともにあいさつに立った栗原小巻・日本組織委員長は、「芸術・文化の感動が日露両国民の心を通わせ、相互理解と相互交流の発展を促す。困難な中でも文化交流、芸術は、決してひるまない」と力強く述べました。

サンクトペテルブルグ音楽会館から派遣されたロシアの若手演奏家（ヴァイオリン、フルート、ピアノ）と日本の演奏家が競演。ラフマニノフ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーなどの楽曲を演奏し、観客を魅了しました。

ロシアの楽曲が主に演奏される中で、唯一日本の楽曲として、坂本朱さん（メゾ・ソプラノ）が、1960年代ベトナム反戦運動で盛んに歌われた「死んだ男の残したものは」（武満徹作曲、谷川俊太郎作詞）を力強く歌いあげたのがとても印象的でした。

### 露日協会会長ガリーナ・ドウトウキナさん来日

## 5月20日に文化講演会&歓迎会



ロシア文化フェスティバル 2025 の公式プログラムで、露日協会の会長で作家・翻訳家でもあるガリーナ・ドウトウキナさんが5月19日から来日し、20日に東京のロシア大使館で

歓迎会を兼ねた文化講演会が開催されました。日本対文協、日ロ協会、日ロ交流協会、国際親善交流センターなど8団体が共同開催したもので、参加者は約 200 名。「ポスト・ソビエトのロシア文学」と題した講演で、ドウトウキナさんは、現在のロシアでは自国の歴史や文化への関心が高まっていること、恋愛小説、探偵小説、東洋への関心など様々なジャンルの書物が出版されており、日本文学の翻訳・紹介も活発に行われていることなどを、興味深く紹介しました。

## 大阪日ロ協会が「ロシア料理会」(5月31日) 「ボルシチ」「ブリヌイ」作りに挑戦



5月31日、大阪日ロ協会主催のロシア料理ワークショップ「ロシアの食卓」が大阪市内の「クレオ大阪中央」で開催されました。同協会としては久々の料理会で、参加者は会場定員いっぱいの28名。在大阪ロシア総領事館のシロフ・ワシリー料理長の指導で、ロシア料理の定番スープ「ボルシチ」と、「パンプーシカ」(パン)、「ブリヌイ」(クレープ)を作り、最後にみんなで作った料理を楽しく試食しました。

大阪日ロ協会では、今後も多くの人にロシアを身近に知ってもらう機会をつくるために、料理会などを企画したいとしています。

## 日ロ交流協会が講演会(6月14日)

### ウクライナ停戦交渉の行方を探る

6月14日、「ウクライナ 外交的解決への道」と題して東郷和彦氏(元外務省欧亜局長、静岡県立大学客員教授)の講演会が、東京港区の会議室で行われました(主催;NPO 日ロ交流協会)。東郷氏は「外交によって合意形成できなければ、どちらかが倒れるまで戦争と流血が続く」と、この2月以来進み始めた「トランプ停戦交渉」の経過を詳しく解説するとともに、ロシア・ウクライナの交渉進展への期待を述べました。

5月16日イスタンブールでの露ウ交渉に続いて6月2日にも交渉はあったものの、ウクライナのロシア空軍基地へのドローン攻撃(6月1日)を機に、双方の攻撃の応酬はさらに激化しており、またイスラエル軍と米軍のイラン原子力施設攻撃で中東情勢がにわかに緊迫化し、和平交渉の行方はいまだ混沌としています。

## 抑留者支援・記録センターが開催(6月9日) 「シベリア特措法」制定15年の集い



6月9日、東京千代田区の衆議院議員会館にて、「シベリア特措法制定15年記念の集い」が開催されました。

「シベリア特措法」は、第二次大戦後シベリアなどソ連各地やモンゴルに抑留された人たちに、国家補償として特別給付金を抑留期間に応じて支給することを柱としており、計6万8847人に総額193億円が支給されました。一人当たり平均30万円足らずで、抑留者たちが受けた苦痛の代償としてはあまりに低額ですが、しかし、それでも外国籍BC級戦犯や、東京、大阪など各地の民間人空襲被害など多くの戦争被害者が補償の対象となっていない中で、国家補償を勝ち取ったことは画期的なことでした。さらに、特措法のもう一つの柱は第13条で、①抑留の実態調査、②遺骨・遺品の収集、③抑留体験の継承事業と追悼事業を推進することを政府の責務としていることです。

この15年間でそれらがどこまで進んだのか。課題はまだたくさん残っています。「集い」には、抑留体験者をはじめ各党の国会議員代表などが集まり、実態調査や遺骨収集をさらに強化するよう政府・厚生労働省に求めました。

また、収容所や病院、埋葬地100か所以上を地図に落としこみ、そこで亡くなった抑留者のデータを表示するなど、最新技術を駆使した情報発信の取り組みも紹介され、抑留問題を語り継ぐ活動の重要性が確認されました。

## 日ロ協会の定期総会(6月23日)

### 設立60周年記念事業など検討

6月23日、日本・ロシア協会の定期総会が都内で開催されました。総会では、高村正彦会長が今限りで退任し、西村康稔理事長が新会長に就任することが確認されました。

今年は1965年に日ソ親善協会(日ロ協会の前身)が結成されてから60周年に当たります。創立60周年記念祝賀会やイベントが秋以降に計画されています。